

わたしたちは山村さんのお母様の支援を以前させていただき、お家でやすらかに過ごしてまいりました。それはおよそ20年前。

今度はご主人が癌になりました。わたしたちのその時の支援を思い出して頂きターミナル期の支援でまたお手伝いをさせて頂きました。その時の想いを奥様に記させて頂きました。やすらかな終末期を山村さんに過ごして頂けたことを嬉しく思います。そしてお亡くなりになったご主人のご冥福を改めてお祈り致します。

我家で夫を見送って

山村 照子 (83歳)

夫とは学生からの付き合いでした。その夫と結婚したのは60年前のことです。当時の夫は顔色が悪く、すぐに熱を出す人でした。

60年前に結婚してからは何でも食べる努力を夫はしてくれました。

定年まで新聞社に勤め、そこを退職後は70歳まで大学で教え、大学を退職後は家で好きに過ごしてきました。

病院が大好きで毎月の検診は欠かさず、胃カメラ等、大病院での検査も積極的に受ける人でした。その夫に4年前、特発性肺線維症が見つかりました。幸い、新薬のお陰で悪化することなく現在までできました。でも、昨年1月のMRI検査で、膵臓がんが見つかってしまいました。尾のほうに出来ており、隣の脾臓まで触手を伸ばした状態でした。

高齢で肺の病気もあるので三菱京都病院の緩和ケアに申込み、成り行きを見守ることにしました。

本人は重篤な病気であることを自覚し、見守る私は、とにかく体力が落ちない様、食べたい物を食べてもらう気持ちで接してきました。暑い夏には食欲が落ち、一生もつと思われたインプラントの歯が根元から5本も抜け、とうとう口からは液体しか入らなくなりました。検診に行く度に体重が減り体力が落ちて、12月半ばには自分から病院に入る事を決めました。

あいにくコロナの真最中で、見舞いに病室に入るには体温表をつけ、1回2人まで、入室しても時間制限のある状態でした。あんなに病院が好きで緩和ケアで過ごすのが夢であった夫が「ここは自由が無い」「まるで砂漠にいるようだ」と言い出しました。家に帰るなら今しか無いという主治医の勧めもあり私は家に連れて帰

ことにしました。退院前日には最新式のベッドを借りることが出来ました。介護用品を扱う業者も迅速かつ親切な対応で安心でした。退院した夫は液体やゼリー状の物しか口から入らない状態です。そのため点滴が欠かせません。そのために早朝でも夜遅くても来て下さる看護師のケアはありがたく思いました。

入院中から胃液がたまるので吸い上げる事も必要でした。それに対応してくれる医師や看護師さん。頼もしく思いました。死ぬ2日前には管を入れたままにしたので、新聞を隅まで読むことは出来なくなってしまいました。でも、土日の競馬を最後まで自分で研究し、息子の助けで馬券購入。

自宅が狭く退院後は息子が住む家に転がり込んだ形ではじめた在宅療養。夜は2人が同じテレビを楽しみ、競馬談議にあけていました。

息子のおかげで私は3度の食事作りに専念。その支援があって体力を維持できました。

夫はこれまで息子の言う事はすべて否定的でした。でも、死ぬ前には息子だけが頼りの状態でした。息子も「お父さんが心配だから」と食事が済むとすぐに帰りました。その息子の姿に「体力が持つか」と案じる毎日でした。夫は用があると明かりを点滅させて息子に知らせ、欲しいものを注文して貰っていました。できることが無くなってしまった夫をこうして息子も懸命に支えました。

2月21日朝、「まだ生きている」とジェスチャーで示した夫の点滴をわたしは息子と2人で腕を動かさないよう押さえていました。

その時、息子が息をしていない事に気がつきました。

穏やかに、静かに夫は旅立ちました。

この看取りで私は何の後悔もありません。

この時間を通じて息子と父親が本当の親子になれた事も嬉しく思っています。

今でも「お父さんがいなくて淋しい」と息子は言います。

私達家族を支えて下さった皆さんに心から感謝します。

ありがとうございました。

